

「グランド・イリュージョン 見破られたトリック」

★★★★

2016（平成28）年9月25日鑑賞<TOHOシネマズ西宮OS>

監督：ジョン・M・チュウ
J・ダニエル・アトラス（オールマイティーなマジシャン）/ジェシー・アイゼンバーグ

（フォー・ホースメンのリーダー）

ジャック・ワイルダー（カードマジックの天才）/デイヴ・フランコ

（フォー・ホースメンの一人）

ルーラ（人体切断マジックが得意な女性マジシャン）/リジー・キャプラン

（フォー・ホースメンの一人）

メリット・マッキニー（メンタリスト、チェイスの双子の兄）

（フォー・ホースメンの一人）

チェイス・マッキニー（ウォルターの手下、メリットの双子の弟）

ディラン・ローズ（FBI捜査官、秘密結社“アイ”のメンバー）/マーク・ラファロ

ウォルター・メイブリー（マカオに住む天才エンジニア、アーサー・トレスラーの息子）/ダニエル・ラドクリフ

ナタリー・オースティン（FBI副長官、ディランの新任の上司）/サナ・レイサン

コーワン（FBI捜査官、ディランの同僚）/デイヴィッド・ウォーショフスキー

アーサー・トレスラー（狡猾冷酷な保険王）/マイケル・ケイン

サディアス・ブラッドリー（マジック見破り人）/モーガン・フリーマン

リー（マカオにある世界初のマジック店を祖母と営む男）/ジェイ・チョウ

リーの祖母/ツァイ・チン

アレン・スコット=フランク（超高性能チップのあるマカオ科学館の案内人）/ヘンリー・ロイド=ヒューズ

2016年・アメリカ映画・130分

配給/KADOKAWA

＜なぜキネ旬の評価は低い？採点に疑問も＞

『キネ旬報9月下旬号』の「REVIEW 鑑賞ガイド」における、本作についての佐々木敦氏、那須千里氏、山口剛氏という3人の映画評論家の評価は星3つ、2つ、3つと低い。しかし、私はマジックをテーマにした映画『幻影師 アイゼンハイム』（06年）（『シネマルーム20』96頁参照）は面白かった。また、そうは言っても同作は所詮19世紀のイリュージョンだったから、前作『グランド・イリュージョン』（13年）が魅せてくれた最新・最高のイリュージョンはケタ違いに面白かった（『シネマルーム32』241頁参照）。もっとも、今や映画はCGやワイヤーを駆使すれば何でもありの映像世界を作ることができるから、前作が見せたような大トリックによるイリュージョンを「マジック」（手品）と呼べるのか？と言われると、それはたしかに難しい。

しかし、本作を採点するについて那須千里氏は「もはや手品ではなく、映像トリックとして楽しみたい。」と書き、山口剛氏は「飛行機や象を一瞬に消し去るマジックを眼前で実際に観れば、感嘆、驚愕するが、それを映画で観てもさほど驚かないのは、CGなどの撮影技術を使えば簡単にできることを誰もが知っているからだ。」と書いている。たしかにそうだが、それを前提として楽しめば、本作の手品とイリュージョンは相当楽しめるはずだ。また、佐々木敦氏は「試写開始後10分でやっと『続篇』であることに気づいた。前作は観ていない。」と書いているが、それで採点資格があるの？

＜登場人物のおさらいと新登場キャラを確認（1）＞

前作ではフォー・ホースメンの面々とFBI捜査官のディラン・ローズ（マーク・ラファロ）、そしてフランスの美人女優メラニー・ロランが演じたインターポールのフランス人女性捜査官アルマとの対決がストーリーの軸とされ、フォー・ホースメンの活躍ぶりが目立つように作られていた。そして、最大の見どころはラストに見るニューヨークでのグランド・イリュージョンだった。

前作でのフォー・ホースメンは①トランプやコインを使い、至近距離にいる少数の観客に見せるクローズアップ・マジックの達人、J・ダニエル・アトラス（ジェシー・アイゼンバーグ）、②エスケープ・マジックのスペシャリストの女性、ヘンリー・リーブス（アイラ・フィッシャー）、③催眠術の達人で、かつ他人の深層心理を読み取り、錯覚などを利用して意識を操るメンタリズムの達人、メリット・マッキニー（ウディ・ハレルソン）、そして④相手の持ち物を素早く盗むピックポケットと呼ばれる技術の達人、ジャック・ワイルダー（デイヴ・フランコ）の4人だった。しかし、本作では②のヘンリー・リーブスに代わる新たなホースメンの女性メンバーとして、人体切断マジックが得意なルーラ（リジー・キャプラン）が登場！

＜登場人物のおさらいと新登場キャラを確認（2）＞

続いて、マジック見破り人のサディアス・ブラッドリー（モーガン・フリーマン）とディランの上司だったFBI副長官の女性ナタリー・オースティン（サナ・レイサン）、ディランの同僚の捜査官コーワン（デイヴィッド・ウォーショフスキー）は俳優も役柄も同じだが、本作ではディランの役柄が5番目のホースメン（？）という形で大きく変わるので、それに注目！

また、前作で悪役（？）のトップとして登場していた、狡猾冷酷な保険王アーサー・トレスラー（マイケル・ケイン）も俳優・役柄は同じだが、本作ではその非嫡出子の1人で、マカオに住む天才エンジニアにして自分の死を偽装し、大手IT企業オクタ社を操る男ウォルター・メイブリー（ダニエル・ラドクリフ）が新たに登場し、本作の悪役代表ともいべき役割を演じているのでそれに注目！

また、メリット・マッキニーの双子の弟チェイス・マッキニー（ウディ・ハレルソンの一人二役）も新登場だが、その奇妙なキャラは本作のストーリーを面白く引っ張っていく意味でも興味深い。さらに本作後半では、4人のフォー・ホースメンが絶妙のカードマジックのチームプレーを披露するシークエンスが大いなる見どころになるが、そこで見事に騙されるのが、本作に超高性能チップのあるマカオ科学館の案内役として登場するアレン・スコット=フランク（ヘンリー・ロイド=ヒューズ）だ。

他方、本作ではフォー・ホースメンがニューヨークから緊急脱出用のシューターで滑り降りた先のマカオで、マカオにある世界初のマジック店を営むリー（ジェイ・チョウ）とその祖母（ツァイ・チン）が新たに登場し、この2人は後半に入ると重要な役割を演じるので、それにも注目！

＜ストーリーはややこしいが、テンポの良さに乗って！＞

本作のストーリーはハッキリ言ってややこしい。それを忠実に追っていくとすれば、多くの登場人物のキャラを正確に理解することと平行して進めなければならぬから大変だ。しかも、『ソーシャル・ネットワーク』（10年）（『シネマルーム26』18頁参照）で「Facebook」の創始者マーク・ザッカーバーグを演じて称賛され、アカデミー賞主演男優賞にノミネートされたジェシー・アイゼンバーグが、前作に続いて本作でも早口のセリフでフォー・ホースメンを引っ張っていくから、そのスピード感はハンパではない。また、本作の紅一点ルーラを演じるリジー・キャプランは前作でアルマ捜査官を演じたメラニー・ロランほどの美人ではないが、その弾けっぷりとスピード感はフォー・ホースメンの一員としてピッタリ息が合っているから面白い。

異国情緒たっぷりのマカオでは一時的な困惑ぶりを突かれる中で仕方なくウォルターのお手伝いをさせられたから、フォー・ホースメンの面々は心外だっただろうが、それも仕方ない。しかし、その1つのシークエンスでフォー・ホースメンが見せる、ピッタリ息を合わせた1枚のカードのパス回しはCG技術の駆使も含めて絶品だ。バカバカしいと言ってしまう身も蓋もないが、私は結構こんな映画が好き。ストーリーはややこしいが、テンポの良さに乗って、スクリーン上のさまざまなイリュージョンの展開を楽しみたい。

＜最後の大舞台はニューヨークからロンドンへ＞

本作で悪役の代表となっているウォルターがやっきになっているのは、あらゆる暗号を解読し地球上の全コンピュータに侵入できるチップをフォー・ホースメンに盗ませること。したがって、本作中盤からのストーリーはすべてそのために費やされているが、本作ではハッキリ言ってそんなややこしいストーリーよりも、スクリーン上に登場するフォー・ホースメンたちがどこでどんなパフォーマンスを展開するのかの方に興味が行ってしまう。しかし、本作ラストのハイライトは、大晦日のロンドンでフォー・ホースメンがゲリラ的に決行する街頭イリュージョンだが、さて、それは何のために？

他方、「科学がマジックに勝つ」と宣言したウォルターは自信満々で、父親のアーサー・トレスラーと共に既にディランの処分を終えていた。そして、4人のフォー・ホースメンを専用ジェット機の中に捕え、今まさに空中に放り出そうとしていたが、さて、その後ロンドン市民と本作の観客の目の前に明らかにされる壮大なイリュージョンとは・・・？なるほど、これがイリュージョン。種明かしをされれば、何だこんなことかと思うのは当然だが、まさにそれがマジックだ。あなたはきっと大晦日のロンドンで展開される一大イリュージョンに幻惑されるはずだ。

本作の原題は『Now You See Me 2』だが、邦題は『グランド・イリュージョン』に「見破られたトリック」というサブタイトルがついている。しかし、さて、あなたは本作のグランド・イリュージョンのトリックを見破ることができる・・・？